

# 緑の風 FAX版



NO. 77 2019年 2月13日 JR東労組

J R 東労組ホームページ

## 新聞記事から学び、考えよう！

物事には、必ず根拠があります。今ある自然にも社会にも、そして現実にも目を背けてはなりません。安全で働きやすい職場を創り出すために、仲間と共に議論しよう！

### 時代を読む

内山 節



何が起るのかわからない一年が、またはじまった。地震、噴火、大型台風などの襲来もあるかもしれないし、世界がどう変化していくのかも、日本の社会が安定を維持していけるかどうかも予想を困難にしている。今年、そんな一年と付き合っていくかなければならないだろう。

視点を、人間たちは持たなければいけなかったのである。群馬県上野村にある私の村の家は、周囲を山や森が包んで

世界が守られていくだろう。さらに述べれば、自然にとつては、自然災害はどのようこともない。たとえ大きな崩落や洪水が起こったとしても、自然はその変化を受け入れ、再び無事な自然をつくりだしていくだろう。

自然にとつて困るのは、人間によつてもたらされた変化である。コンクリートとアス

での人間たちは、自然災害に對しては、被害を最小限に食い止める知恵を働かせてきた。洪水や崩落がおきやすい場所には家を建てず、いざというときの逃げ道も確保した。ところが今日の社会は、大災害を生みやすい構造をつくっている。もしも東京で大地震が起きたら、一体どれだけの被害が出るのだろうか。

## 自然災害の陰にある「人災」

伝統的な思想では、日本の人たちは、社会は自然と人間の力でつくられていると考

でいる。その自然をみていると、自然は何よりも無事を求めているという気がしてくる。これまでと同じように無事に春を迎え、春が過ぎれば無事な夏がやってくる。自然にとつては、それが何よりなのである。無事が維持されれば、森のなかでは、花が咲き、秋には実が落ちて、虫や鳥、動物たちが喜ばず自然の

ファルトによつて固められた都市は、自然が生きていることを拒絶している。自然を排除してしまつたかのような河川や海岸。戦争や有害物質、放射

自然災害が、人間たちがつくつた社会構造によつて大災害になつていくとしたら、半分は人災である。原発事故によつて、安心して住めない広大な場所が生まれたように、大きな危機の陰には、人間の誤つた行為が隠されている。さらに社会や世界の不安

う。外国との対立は、日本の政府が諸外国と友好的な関係を築いていないことから発生したといつてもよい。格差社会から生みだされる不安、お金をばらまくことしかしてこなかったこの間の財政、金融政策から発生する経済破綻への不安、拝金主義を助長しつづける政策がもたらす社会荒廃。そしてひたすら権力の維持と自己の保身に走る政治。そういう今日の退廃が、何が壊れていっても思議ではない、不安に満ちた時代をつくりだしている。

てきた。欧米だと、社会は人間が創造したといつことになるのだが、日本では自然もまた社会を創造したメンバーとしてとらえられてきた。だから日本では、自然はどのような社会を求めているのかという

につくりだしてきた。そしてこのあり方は、人間にとつても同じだった。かつて

は、すべて人間がつくりだしたものだといつてもよいだろう。

残念ながら現在の私たちは、いまの社会も政治も経済のあり方も、うんざりするほど退廃していることを認めざるをえないのである。そして自然が無事を求めるように、私たちがもまた無事な社会や世界を求めて、この時代と向き合っていくしかない。

（哲学者）

2月10日

東京新聞